

徽州商人のくらしが考究される視座、 そして“考えられるガバナンス”の記述 ——「量子都市ガバナンス」論の事例研究として——

程 雅 琴 谷 村 光 浩

■もくじ

1. はじめに
2. 中国社会の変動が読み解かれる視角から
3. 徽州商人の「パラレル“居住”」再考
4. 「“考えられるガバナンス”の記述」の練磨

1. はじめに

国際移住機関(IOM)の *World Migration Report 2011* [世界移住報告書 2011]によると、近年、出生国以外にくらす人々は、世界全体で2億 1,400 万人と推計され、7億 4,000 万人とみられる国内流動者⁽¹⁾と合わせると、実に10億人近く—世界の人口に照らせば、およそ7人に1人—が居住地を移しているという(IOM 2011, 49)。また、同報告書は人の国際的な移動に関わる動向を概説するなかで、移民による送金は一昨今の世界的な経済危機が影を落とす海外直接投資(FDI)や政府開発援助(ODA)に比して、堅調な伸びが予測され—、2013年には5,360億米ドル、うち途上国へは4,040億米ドルに達するとの推算も掲げている(55-56)。

国際社会では、かねてより「グローバル化・都市化をすべての人々のために」とする手立てを構想することが、まさに差し迫った重点課題とされてきた(UNCHS 2001, v; Tanimura 2005, 53)。ただ、上述した人々の“流動性”も勘案して施策を紡ぎ出していくには、まずは討議を進める基盤としての“ガバナンス”を、これまでになくしなやかに発想することが求められ

よう(谷村 2009, 51-52; 谷村 2012, 49)。このような問題意識から、旧来のガバナンス論の“延長線上”で—ことに“定住者”なる人々にとって“しっくり”といく—“もっともらしい”新機軸を手際よく描き出すということではなく、いつもながらの慣れ親しんだ思索の枠組みからはいったん離れ、“物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述—「パラレル“居住”」対応の「量子都市ガバナンス」論の構築にむけて—”(谷村 2009)を論じてきた⁽²⁾。量子力学での思考法から推しはかり、暫定的に整えた「量子都市ガバナンス」などの語義には、近刊の“移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる「量子都市ガバナンス」の記述”(谷村 2012)にて、さらに筆を加えた—これまでの作業をもとに、関連する要語を含めて、それぞれの定義説明をはじめに提示しておく(Box 1)—。

今般、この論文では、引き続き「量子都市ガバナンス」論の構築にむけ、いわゆる近代国民国家という“想像の共同体”の枠組みからは遠い「明清中国」にて、広範な商業活動を展開した有力商人のなかから、徽州商人⁽³⁾の「パラレル“居住”」とも見てとれるくらしの説き明かされ方を勘考し、「“考えられるガバナンス”の記

Box 1 「“考えられるガバナンス”の記述」の検討作業にて案出してきた要語[試案]

【パラレル“居住”】

「パラレル“居住”」とは、「十分な解を確保するため、個人が複数のテリトリー/ノンテリトリー空間に“住まい”，各“居住”状態が量子力学的な重ね合わせ[，もつれ合いになっている]状態にあること*」をいう(谷村 2009, 63; 2012, 49, 67)。

【量子都市ガバナンス】

「量子都市ガバナンス」とは、「みなし“定住”社会を“近似的”に読み解き、運営してきたニュートニアン・パラダイムを深化させ、複数の“居住”状態/アイデンティティの量子力学的な重ね合わせ，もつれ合いのありようを，多世界解釈にならない，多“居住”/多アイデンティティ解釈することから思索する都市ガバナンスの提案である*」(谷村 2012, 66)。

【ニュートニアン都市ガバナンス】

古典力学から推しはかるこのガバナンスは，以下の「固相」や「液相」の考え方を含め，その世界観は，最初に「不動で不変の“国民国家”という枠組み」を設定し，社会全体を国際機関，市民社会組織，企業市民等の「アクター」が織りなす精巧な機械のようにとらえ，人々の「定住」を支える基本法則が世界を支配しているとの見方といえよう。このニュートニアン・パラ

ダイムは，社会を“近似的”に扱うのであれば有効との類推も成り立ちうる(谷村 2009, 62; 2012, 49-50)。

・「固体相[固相]のガバナンス」とは、「テリトリーをもとに定住者が編成する旧来の共同体，地方・中央政府という近代国民国家の構成要素を基軸にしたもので，これは，そうしたロジックの補強・強化を企図する国際機関やグローバル企業によっても共有される。なお，移住者は，唯一の最適解を求めて流入してきた新定住者との枠組みの中で処理される」(Tanimura 2006, 295; 谷村 2009, 51-52; 2012, 50)。

・「液体相[液相]のガバナンス」とは、「唯一の最適解として選択された定住地からグローバル空間を駆け回る人々や，そうした定住地を求めた移民が織りなすトランスナショナリズムのように，固体相[固相]の想定する静的枠組みを越え，地域共同体が複数の社会とのネットワーク状の関係性の中で編成されていくという，流動者からみた動的なとらえ方である」(Tanimura 2006, 295; 谷村 2009, 52; 2012, 50)。

*なお，“/”とは“and/or”，すなわち“および/または”の意で遣う。

述」のさらなる練磨をはかってみたい。先学の論考を足がかりに推究を深めるこの事例研究は，前掲した谷村光浩の小考(2009/英語版 M. Tanimura 2009)が中国語へ訳出された際，その“従物理学類推得出的‘可想象治理’記述”(M. Tanimura 2011/李勇訳)の校正を担い，加えて

徽州の歴史・文化などに通じた程雅琴と，谷村光浩との共同作業として進める。

具体的には，最初に「中国社会の変動が読み解かれる視角から」考察する。まずは，今日にいたる「中国」を，外の尺度でなく“内側から考

察”するとのアプローチ,宋代以降に世界を解釈する新たな枠組みとして仕立て上げられたという「理気論的世界観」の深意,そして中国それ自体の語で説き明かされていく,明清の「地方自治」とその担い手の構図を概観し,ひいては,先学によって提起されてきた考え方とは「いかなる“ものの見方”であるのか」を推しはかる。次いで,徽州商人については,複数の拠点を往復するくらしぶり,族譜[一族の系譜]の編纂,外来者ばかりの都市における“市政”,加えて徽州商人の渡世に寄り添ったとされる“女性たち”をめぐる高論をたどり,これらも「いかなる“眼”でもって描き出されてきたのか」と改めて検討する。こうしたステップを踏み,本論文の主たる課題である「“考えられるガバナンス”の記述」をさらに練り上げる。ことに,「量子都市ガバナンス」については,語義への補筆の後,その「“量子力学的なありよう”の解釈」にも論及したい。最後に,本研究をさらに推進するにあたり,次なる段階と考える作業やその課題をごく手短かに付記する。

2. 中国社会の変動が読み解かれる視点から

2-1. 「中国」を「内側から考察」するアプローチ

まず,何よりもこれまで「中国」はいかに考究されてきたのか。冷戦下アメリカにおける中国近現代史研究のアプローチを精査したウェレズリー大学・P. コーエンは,その著書『知の帝国主義』(原書1984/佐藤訳1988)にて,訳者があとがきで簡明に説くように「多くの研究者が近代中国を分析する際に暗黙のうちに自明の前提としてきた思想枠組や価値判断」(289)を炙り出す。そうして,“ものの見方”としては,いずれも「西洋中心的色彩」(31)が濃厚で「そこでは探し求めるものがあらかじめ決まっており」(32),重要とされる変化—ときに「瑣末な変化」

(33)—が提起されていく,次のような「衝撃—反応」「近代化」「帝国主義」という3つの仕法を批判的に論じている(29-30)。

「衝撃—反応」アプローチは,もっぱら「西洋の挑戦」に対する「中国の反応」という観点で事態を捉えようとする……。……西洋が明白な役割を果たしていない出来事を重要でないとしたり,あるいは逆に,ある出来事が西洋に対する中国の反応のあり方を浮彫りにするかぎりにおいてのみ,その出来事を重要であると判断しがちなのである(29)。(傍点原著者)

「近代化」アプローチは……。……,どの種の変化が重要な変化であるかという問題を,西洋の限られた経験にもとづいて定義し,それを外在的に中国史に当てはめる……。……西洋近代の歴史こそがあるべき歴史で……。……,そのあるべき歴史に照らして特異な(もしくは逸脱した)中国の出来事こそ,念入りの検討が必要であるという前提すら……。……伴っているのである(30)。

「帝国主義」アプローチ……。……は,中国の歴史は「自然の」もしくは「正常な」発展の筋道を辿っており,西洋帝国主義……。……がそのあるべき発展の筋道を妨害したのだという……。……。ところが……。……,中国は停滞状態にあり,外からの揺さぶりが不可欠であったという風にも考えるのである。つまり……。……,西洋をいかに取り扱うべきか当惑している(30)。

このように,西洋という外の尺度でもって中国近現代史を説き起こすのではなく,P. コーエンは,地域・地方性や民衆のくらしぶり—商人,下層郷紳,さらにはならず者等の指導的役

割一をも視野に、可能なかぎりその社会自体の“言葉”と“ものの見方”にもとづく内からの考察、すなわち多様かつ多元的で、しかも動的な「中国自身に即した」アプローチの重要性を力説する(34, 236, 250, 266, 271)。そして最後に、実際には、内側から取り組む中国の研究者にしても、「ある意味ではアウトサイダーなのである」(280)と付言した上で、問題はまさに「歴史家がみずからの発する問いに内包された暗黙の前提に無自覚である時にこそ起こる」(280)と結んでいる。

昨今はグローバル化の進展が多方面で語られてきたが、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)名誉教授・J. フリードマンも『中国都市への変貌』(原書 2005/谷村訳 2008)を論考するにあたり、そうした“内側から”のアプローチの重要性を強調する。何にもまして、「中国」とは、「単に国民国家の枠組みに留まらず、世界の大文明のひとつでもある」(6)と読者の注意を喚起するこの都市・地域開発論の大家は、好適な視角とされがちな「グローバリゼーションに代えて、内発的発展の一形態として一内から生じるひとつの漸進的な過程として一の都市化に重きをおく」(17)ことの主意を、次のように述べている(16-17)。

グローバリゼーションを分析の枠組みに取り入れると、国内的な視座、歴史的な歩み、そして内発性がなおざりにされるほどに外的な力学が特別扱いされるきらいがある。また、社会・文化的、政治的変数が除外されるほどに、経済的側面が重視される。さらに、中国の場合、何が「内側」で、何が「外側」であるのかを語ることが、必ずしも容易ではない。……中国系ディアスポラを「大中華圏」に欠くことのできない一部分としてみると、他ではグローバリ

ゼーションの過程と称されるであろうことが、突如として、「開放された中国」のごとき、ひとつのトランスナショナルな中国の内発的過程になる。

要するに、中国は「タブラ・ラサ〈何も書かれていない石板〉」ではなく(31)、たやすいことではないが「究極的には、……それ自体の言葉で理解され、内側から考察され……、その歴史にほとんど関連性がない基準よりも、それ独自の基準で評価されなければならない」(32)とのJ. フリードマンの論旨は、先ほどのP. コーエンの見地に相通ずるものがある。

2-2. 理気論的世界観—変移する社会、そして世界を解釈する新たな枠組み—

東京大学名誉教授・溝口雄三他も、『中国思想史』(2007)という通史の描出に際して、欧米・日本のみならず、中国の研究者でさえはまり込んできたという「西洋中心主義の視座」を退け、内なる「中国の眼」でもって—中国世界の相対化をもちきりながら—、その大きな歴史的变化とそれを生じさせた「動力」をとらえることに尽力する(243-244)。巻首には、「自らを中国とアイデンティファイしてきた世界」の軌跡を、通例の王朝史にとらわれず、次の大変動期に着目してたどる輪郭が明示されている(i-ii)。

- [1] 秦漢帝国にいたる過程：二千年におよぶ中央集権的な王朝体制の誕生
- [2] 唐宋変革期：唐代までの門閥・貴族社会は、宋代以降、実力本位の科举官僚制社会へと転換
- [3] 明末清初期：朱子学の民衆化や陽明学の興起—士紳が主体的に担い始めた地方の社会秩序
- [4] 清末民国期：「地方による地方のための軍隊」建立—王朝体制を瓦解させた辛亥革命

このような観点は、「おそらく他書には見られない特色となるであろう」(243)との自評も付された同書をひとつの適例に、後述する徽州商人のくらしぶりにも深く関わる、中国思想の進展、それを導いた担い手や社会がいかに読み解かれるのか、要所をひとまずとらえておきたい。

最初に、「天人相関と自然」から『中国思想史』を説き起こす池田知久(2007, 4)は、「天が人間や国家をつくったという言説」について、その実、「人間とその営む社会こそが“天”という観念

をつくってきた」と見てとる。前漢の儒家・董仲舒の「天人相関説」(13)において、天が果たした役割にしても、天子の権力強化に力を添え、ひいては「世界外にある董仲舒の分身として天子の支配を自らのい^くだ^く儒教(春秋公羊学)へと方向づけること」(17)に相違ないと洞察する。

宋代以降、「天」観に変化が生じ、新たな思想言説として「理気論的[朱子学的]世界観」(Box 2)が展開される事象にいたっては、次いで「唐

Box 2 「気」・「理」：理気論的世界観—『岩波哲学・思想事典』より—

気 中国的存在論、宇宙論を構成する最も基本的なカテゴリー。宇宙に充滿する微物質で、万物を形成し、生命や活力を賦与するもの。物質＝エネルギー。ただし、ガス状に連続していて、アトムのように分割できない。また、物質といっても、精神作用も気のはたらき(神)に帰せられるから、デカルト的な精神と峻別される二元論上の〈物質〉ではない。物質も精神も一元論的に包括する概念。また、物を構成するだけでなく、物と物との間の空間も気であって、この宇宙には真空のような虚空間は存在しない(張横渠の太虚即気説)。

..... 北宋の張横渠は、..... 〈太虚即気説〉を主張し、仏教徒によって空無化されていたこの現実世界の実体性を回復しようとした。南宋の朱熹はこの横渠の気論を継承しつつ、形而上と形而下のものとを峻別し、形而下の現実社会に〈気〉を当て、それを超えた形而上の存在として〈理〉を設定した。.....

理 中国哲学・思想史上の基本概念的のひとつ。物事のすじめ、条理、すじみちを言う。.....

【宋代以降の理】「理」が儒家思想の中心概念の位置にまで高められ、世界の普遍的な原理、宇宙万物の存在根拠、またその法則性といった含意で用いられるようになるのは、宋学[朱熹を代表とする道学など、宋代におこった儒教]の登場を俟ってのことである。..... 存在と現象の全てを「理」と「気」の二概念で説明する壮大な理気論の体系が朱熹(朱子)によって集大成された。

理気論的世界観成立の背景としては、まず主宰者的・意志的とも言える「天」観が転換し、宇宙・自然界全体を法則的に理解しようとする観点が生じたことが挙げられる。又、虚・無を標榜する仏教や老荘系の思想に対し、道学は、あくまで実・有の世界の内部で、そこにおける原理や道徳的・倫理的な当為法則を見出そうとした。..... 朱熹によれば、「理」には、..... たんなる客観的な自然法則としてのみならず、一方で人間の本然的な秩序感覚にもとづく倫理的な当為法則としても観念されたため、かくして道徳・政治・自然が相互に貫流し合う壮大な世界観の構造が構築された。

宋の変革」を担った小島毅(2007, 140)が、そうした理論の案出それ自体のために思想的営為が推し進められていたわけではないと強調する。

「経済的な富裕層と実際にはかなり重なる」(86)士大夫が、「在地社会の指導者、ローカルエリート(local elite)として、秩序の担い手になった」(134)と自負する社会への変移にあって、このような「在地知識人が自らを教化の主體として捉えたときに朱子学が誕生したといふべき」(140)と記している。しかも、「気質の性を本然の性[理そのものの]の状態に戻していき、本来の正しい秩序を回復することが、各人の修養の目的となる」(129)との思考によれば、貴種とされていた君主さえ、内面を問われるようになることを説き明かす(113)。

なお、溝口雄三(2007, 237)は、「清代の礼教[民衆儒教]」までを論じた後、従来の思想史では「宋代の宋学、明代の陽明学、清代の考证学」といった「学術史としての儒教史」が叙述されてきたが、「社会思想史としての儒教史」を見極めるには、むしろ「宋代の官僚中心の道德修養の学、明代の民衆を主体とした道德拡汎の学、清代の民間(郷里空間[在地の社会秩序が形成される場])に見られる民衆儒教の組織的な浸透」の流れを押さえることが肝要と、主眼の置き方を教示している。

2-3. “地方の公事は地方の手で”—中国の「地方自治」とその担い手—

「転換期としての明末清初期」から「激動の清末民国初期」にかけての「地方公論」の尊重・拡大、社会秩序の形成、さらには「地方自治」を、先の「郷里空間」なる中国の実態に根ざした概念で読み解き直す溝口雄三(2007)は、「皇帝支配は専制的であり反人民的であるとする思考」、「体制・反体制あるいは官と民の二項対立の思考」などの「定説的思考」にとらわれては

ならないと(195)、言うなれば“^{アンラーニング}学習棄却”を促す。そして、そのもっともらしい“民間[主導]の「地方自治」”との言い表し方については、中国それ自体の語で、よりの確とする「郷治[“地方の公事は地方の手で”という意味での地方自治]」(205)に鑑みて、留意すべき点を手際よくつく(164)。

中国では、「自治」といっても、官体制＝「官治」から制度として自立した「民治」の領域が建立されるという方向に向かうのではなく、ただ地方の公事(すなわち道路の修理、運河の浚^{しゆんせつ}、病院・孤児院・養老院の設置など)を地方の官と紳および民が共同して実施する、その公共の営為を近代になってさかのぼって民間の「地方自治」と称しているのであって、ヨーロッパの地方自治とは歴史的文脈を異にしている。……便宜的に用いている「民間」という語も、官から自立した民の空間領域を指すのではなく、官・紳・民が共同して地方公事进行处理する、その地域空間を指しているものであって、本来そこには意味上のずれがある。……「郷里空間」という用語を用いようというのは、民間という語がもつその語義上の不全を防ぐためにほかならない。同じく「自治」という語にも問題があり、この語は暗黙のうちに「官治」ではなく「民治」であるという限定を受けていて、中国の実態に即していない。(傍点原著者)

これに加えて、そうした「“地方の公事は地方の手で”」という構図を、強いて「自治」とみるなら、「中国の自治は、ヨーロッパの“権利としての自治”に対して、さしずめ“公益のための自治”“道德行為としての自治”といふべきものであった」(210)とも巧みに括り、その特徴を述べている。

ついに、1911年(宣統3年)、辛亥革命は各省の独立というかたちをとる。この中国思想・社会史の重鎮は、その素地には、ほかならぬ「郷里空間の、明末の県範囲の規模から清末の省範囲のそれへの拡大充実」(202)があったと強調する⁽⁴⁾。清末の「成熟した省」に関しては、次のように要約されている(214)。

省とは、郷・鎮・県・府をつらぬいて同一平面上を同心円的あるいは放射線状に縦横に流れるネットワーク流であり、それが一省の郷里空間の政治社会空間である。その空間にはギルドのネットワーク、善会・善堂[善挙を实践する組織体]のネットワーク……など、省内を縦横に走る諸ネットワークの連合がある。そのネットワークが団練[自衛組織]を組織し、軍隊化させる基礎の力量であった。

いみじくも、小島毅(2007)は、理気論的世界観のもと、このような「郷里空間」の中核的存在として求められる「人格の有徳者」を論考の糸口に—そうした指導者を支える宗族(父系の親族集団)や科举制度にも言及しながら—、彼らのアイデンティティのあり方を、以下のように説き明かしている(135-136)。

その人格的有徳者は地方官であってもよいし、その土地の名士でもよい。そもそも、ある人物が官僚になれば地方官だし、服喪や引退で帰郷すれば名士になる。つまり、両者に質的な相違はない。これを前者は官僚だから国家を代表し、後者は資産家だから社会を代表するとして、そこに矛盾抗争を見ようとするのは、西洋近代において理念化された二項対立「国家と社会」を中国に当てはめただけである。中国自体にもとどころした対立観念はない。「国家と社

会」を前提にすれば、ローカルエリートは両者を橋渡しする媒介者、もしくはその中間領域の担い手という位置づけになるが、おそらく当人たちにとっては、それは士大夫として当然の役割であって、理念的には天下国家のためであった。

ときに、この士大夫をめぐっては、興味深いことに「郷里空間」での礼教秩序の構築・浸透に際して、「淫祠」[好ましくない祠廟]とそれ以外の祠廟とをしかるべく仕分けた、すなわち「記録者の目から見て祀るに値するものなのかどうか」をその時々に応じて評価した、言わば「観察者としての……[在地]知識人」というアイデンティティも、中国思想・社会史の“場面”のなかで注視されている(137-139)。

2-4. いかなる“ものの見方”であるのか

まずは「中国社会の変動が読み解かれる視角から」として、このセクションでは先学の示唆に富む論考を概観してきた。《それ独自の基準で評価されなければならない》との論調を勘案すれば、“されど敢えて”との言葉を添える必要があるのかもしれないが、これより【1. はじめに】に掲げた「ニュートニアン都市ガバナンス」、さらには「量子都市ガバナンス」という理論的枠組みの試案と照らし合わせ、いかなる“ものの見方”であるのかを推察しながら整理してみたい。

はからずも、《西洋という外の尺度》で描き出された「中国史像」をめぐり、P. コーエン(1988, 41)は、「物理学の領域では、過去一世紀の研究の発展によって、ニュートンの法則そのものは否定されなかったものの、その法則がある限られた範囲内においてのみ適用可能であることが明らかにされた」との例を引きながら、問題点は「その中国史像が誤っているというこ

とにあるのではなく、妥当性の範囲が定かでないということにある」とも論じている。ここに科学作家・竹内薫(2001, 12)の簡明な言葉を継ぐと、まさに「世界は、正確には、量子力学で記述される……。だが、近似計算ができる場合があって、その近似計算のことをニュートン力学とか古典力学というのだ」と考えても差し支えない。さらに、ニュートンの観測者と観測対象との関係については、「“固定された1つの観客席から固定された1つの舞台を見る”という単純な構造」(竹内 2004, 98)とも説かれている。

さすれば、《中国自身に即した/“内側から”の/内なる「中国の眼」で……とらえる》アプローチは、むろん極めて意義深い知的チャレンジに違いないが、ニュートニアン・パラダイムに留まるかぎり一かりに量子力学と古典力学との“つぎはぎ”とされるコペンハーゲン解釈がなされるとしても一、《観察》対象なる社会の仕組みやその主潮を《近似的》に描き起こすような作業となることをまぬがれない。つまるところ、先覚のそうした視角においても、ある意味では《探し求めるものがあらかじめ決まっております》、《重要とされる変化》やその際立った《担い手》が見出され、《観察者》がそれほどでもないと思極めた「“居住”状態」や「個のあり方」は《瑣末》なことと処理されることに変わりはない。

そもそも、「中国」なる社会の変動を《その社会自体の“言葉”と“ものの見方”》に根ざしてと提起されるが、その《“言葉”》や《“ものの見方”》とは、端的に言えば、社会の主要な《担い手》として《観察》された—そして、みずからもそのように見出していた—人々が、おおよそ具合がよいとした言説や主潮ではなかったのかと推察する。たとえば、「理気論的世界観」を共有す

る指導的役割にあった《担い手》に関して、さまざまな「個のあり方」を“選り分けて”くらすというのではなく、あたかも「量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありよう」がコペンハーゲン解釈されたようにも読み取れる記述がみられたものの、その世界観と連関・整合しないアイデンティティは、“典型例”として掲げることが差し控えられてしまったのではないか。そこから脱け出る必要などないように思われる“主流に属する人々”でさえ、それとは矛盾する価値観—西方から伝えられた仏教などをあわせ持ち、「量子力学的に共存している複数の状態/あり方の全体」において、日々を生き抜く“闘い”が展開されたのではないか(谷村 2012, 67)とも思索する。

さらに、《その社会自体》について、溝口雄三(2007)は、《民間[主導]の「地方自治」》といったもっともらしい言葉遣いが抱え込む問題点を鋭くとらえているが、学習棄却が求められるもうひとつの観念は《地方》であろう。《「郷里空間」[在地の社会秩序が形成される場]》が《同心円》状に広がり、《県/省範囲》という行政区域と符合するかたちで説かれるさまは—実際には、それとのいくらかの不一致が細やかに指摘されたとしても一、基本的には、「入れ子式の箱のような古くから好まれた型」(フリードマン 2008, 211)を想起させる。最初に「不動で不変の“国民国家”という枠組み」を設定し、……と提示してきたニュートニアン・パラダイムとは前提や諸相が異なるものの、「固相のガバナンス」にも通じるその“ものの見方”や要語では、《近似的》にしっくりとくる《地方》、ひいては《社会》を描けても、人々が「十分な解」を手に入れるための“闘い”の「場/個のあり方」(谷村 2012, 67)は拾いきれないのではないか。

なお、『中国思想史』にて新たな“主潮”を創出

しようと試みてきた人々の“闘い”に関しては、先に述べたようなニュートンの「固定された1つの観客席から固定された1つの舞台を見る」という単純な構造」ではなく、言うなれば、これも“量子力学的なありよう”を思い起こさせるような記述がみられる。「天人相関説」において、董仲舒は《分身》とともに、有意な“状態/あり方”として取り上げる《[天子の支配する]世界》と《天/世界外》[“架空”世界]との、見様によっては“パラレル世界”を《観察》する。また、《道德・政治・自然が相互に貫流し合う》「理気論的世界観」にいたっては、《士大夫/在地知識人》が、旧来の《天》に代えて、《本然/本来》という“スタンス”としての《道德的・倫理的な》世界と、《祠廟》にまつる“高德”な神々も息づく、みずからの《在地社会/郷里空間》との“パラレル世界”を《観察》していると推しはかりうる。その構図は、コペンハーゲン解釈のごとく「“居住”状態/アイデンティティの収縮」を仮定した上で、《観察》されるべき“状態/あり方”以外は捨て去られ、向き合うべき《世界/社会/空間》のみが、今度は多世界解釈のように重ね合わせ、もつれ合いになっていると言い表せよう。

3. 徽州商人の「パラレル“居住”」再考

これより、まずは徽州商人の実質的に「パラレル“居住”」と見てとれるくらしに関わる先学の考究を概観する。そして、それらの視座を、試案としてはじめに掲げたガバナンスの理論的枠組み(Box 1)と照らし合わせながら、改めて考察してみたい。

3-1. 複数の拠点を“往復”する“徽州”“商人”

徽州商人のくらしぶりについては、徽州府績溪県出身で、近代中国の文芸や教育の刷新に尽力した胡適[1891-1962]の『胡適口述自伝』(唐

訳注 2005, 14)に、あらましが語られている。世界史リブレット『徽州商人与明清中国』(中島 2009, 85)には、その主要な箇所が訳出されている。

徽州商人の子弟は十[一、]二、三歳になると、故郷を離れて都市に行き商売を学んだという。最初は[家族または親戚の店にて三年間]無給で徒弟奉公をして、その後は若干の俸給をもらうようになる。二十一、二歳になると[三ヵ月間、有給の休暇を与えられ]故郷に帰って結婚し、また[単身で]都市にもどって商売を続け、故郷の家族に仕送りをした。その後も三年ごとに三ヵ月だけ[有給の休暇で]故郷にもどって妻子と生活するので、「一世夫妻三年半」(一生つれそっても一緒に暮すのは三年半だけ)といわれるほどであった。

さらに、このような複数の拠点を行き来する居住状態は、概して、科学の“受験対策”とも深く絡み合っていたことを、『明清の徽州商人与淮揚社会の変遷』を描き出した王振忠(1996, 63)は、次のように記している。

徽州商人は、「商籍」を取得すると、科学試験を僑寓地[仮住まいするところ]で受験することが可能になる。なお、彼らは固定戸籍[民籍]を持っているため、論理的には本籍地で受験することもできる。……

一部の徽州商人は、科学試験における戸籍制限の疎漏を利用し、「商籍」と「民籍」で二重受験、すなわち「商籍で受験に成功しなければ、民籍でも受験する」ために、本籍地と僑寓地を行き来して重複受験し、好機をうかがう。

そうした徽州商人の「個のあり方」に関しては、19世紀の『漢口』をつぶさに描く W. Rowe (1984, 250, 342/江溶・魯西奇訳 2005, 306, 416) が、みずからを一時的な滞在者と語る人々でさえ出生地への偏狭な愛着—“出生地アイデンティティ(native identity)”—を弱め、“漢口人”なる意識—“居住地アイデンティティ(locational identity)”—を培うさまを、「ローカル・アイデンティティの多元化(multiplication of local identities)」と論じている。また、宋代商業・経済史、『中国都市史』の碩学・斯波義信(2002, 143)は、「本籍」と「流寓(客寓)」という複数の拠点を往復—数世代後、永住に踏みきったとしても本籍への帰属意識を維持—する居住状態にて、「社会的にはたとえば徽州人で、法的には[転籍先の]漢口人という使い分け」がなされることから、「状況に応じていくつかの名刺を出す」がごときと、「多重・多元なアイデンティティ」を唱えている。

ときに、斯波義信(2002, 172)は、科学への挑戦とは、役人としての栄達という行路を一貫して突き進むことではなく、中途の「生員段階で失敗しても、身についた読み書き算数をてこに実業界で出世できる」といった具合に、将来「あれかこれか」取りうる複数のありようを絶えず視野におく、商人たちの「出稼ぎの戦略」に根ざしていたことを解することが重要という。徽州[新安]商人は新安画家としても歴史に名を留めているが、その商売と儒学をめぐる思いについては、明清の美術史を専攻する張長虹(2010, 5, 33)が、既存研究より「商売は多くの利益をうるため、儒学は高名をうるため」、「経済倫理については[商の意義を認めた]陽明学に、政治については程朱理学[宋学]に則して」などの結語をたどるとともに、「子弟への商業教育や[優雅な立ち振る舞いとしての]文化的な知識蓄積の重視」も顕著な特徴と考察してい

る。

徽州商人が推し進めた「商業価値観教育」なる策とは、せんずるに、彼らが「その影響力の拡大とともに、ひとつの階層としてのアイデンティティに目覚めはじめ」、みずからの生存を脅かす要素を退け、かつ社会的地位を高めようとした“闘い”と見てとる曹天生他(2010, 116)は、その「多重的視角による明清の徽州商人研究」において、示唆に富む論述を展開している(118)。

徽州人が伝統とはまったく異なる新たな価値観を形成したとは言えない。ただ儒家の伝統的な見方を根本から改革、情況に順応、融和する二重の価値観を創出したに過ぎない。まさに米国籍華人学者・余英時が指摘するように、彼らは“伝統から最も遠いところまで行っただが、伝統の枠を飛び越えたことはなかった”。とはいえ、徽州人の新たな価値観と伝統には差異がある。換言すれば、その新たな価値観は伝統の枠から飛び出すことなく、伝統の枠内にあって、商人の地位をこれまでになく高度に向上させた。……新しい商業価値観の喧伝と受容により、徽州人が商売に従事する際の心理的な重圧は軽減された。……

このように“徽州”出身の“商人”という存在感のある「私」が立ち上げられ、加えて、プリンストン大学名誉教授・余英時(2009, 23)によれば、16世紀には「“士”と“商”の境界線が曖昧になったため、当時の“商才”にはほとんど“士魂”があったということで……“士商互動”[士と商の合流]という真新しい局面が現れた」と評されている。

3-2. “つくり出される”族譜

明清「徽州商人の経営方式」を、臼井佐知子(2005)は、宗族関係の重視・利用、さらには「宗族の擴大組織化の様相」と結びつけて検討を進めている。彼らが「外地へ赴き商業活動をする」(408)にあたり、至要な資金や情報をうる手段として、地縁や血縁を基盤にネットワークの拡張・強化をはかったことについて、まずは「當時の中國のような流動的社會では、地縁とは同じ土地に居住し生活をともにするという意を超えて、あくまでも自己もしくは祖先の出身地を同じくするという意味での同郷であって、血縁もまた、ともに居住し生活するという意を超えた、祖先を同じくする關係である」(98)と説く。その上で、それらは「いずれにせよ特定の空間、時間を超えた縁であり、…… 共通の祖先をもつという認識を共有することにより、機能していくもの」(99)であるがゆえに、より広範な力の結集をめざして、宗族組織の再編、族譜[一族の系譜]の編纂がはかられたことに着目している(406)。

具体的には、徽州にて最も多い姓であり、なおかつ系譜がたどりやすいという汪氏の移動と商業活動に関する考究において、その起源にまつわる記述には明らかな矛盾が見受けられ、後に編纂にあたった者も誤りを直さずにいることを、著者は「何故であろうか」と問う。そして、おおよそ「族譜編纂の目的は[事實を正確に記すことや]ルーツ探しにあるのではなく、[一族の結束のために]“現在”における自分たちのアイデンティティの確認とネットワークづくりにあった」(146)と見透かす。さらに、『新安名族志』などを通じた推究では、「宗族の組織化が進み、族譜を編纂する過程で、祖先は中原を出自とするという歴史を創作すると同時に、実際には同宗でない人々も加えて宗族組織を創りあげていったと考えられる」(335)とも述べてい

る⁽⁵⁾。

ちなみに、先の考究では、「外地で財を得て郷里に戻る」といった「客商としての移動」(143)から、一部の成功者が移動先にて「状況に應じた“業”の選擇」として「商業からの撤退」、「定住」(144)への経緯などを踏まえ、「この汪氏の動きをあえて例えれば“液體”の動きということができよう。…… この“液體”はそれ特有の密度や色彩をもち、他と混ざり合いつつ獨自の世界をもつ」(146)との検討も加えられている。

さて、族譜編纂の作為的な部分をめぐっては、中国古代史、家族・宗族研究の泰斗・牧野巽(1985)が、その著作集第六巻『中国社会史の諸問題』にて、「奇矯の言を弄するようで…… 恐縮であるが、…… われわれは宗族というと、家族や村落などとともに何となく自然に与えられたもの、または慣習的なものと考えやすい。そしてその中にある人間の意志的・努力的方面を忘れやすい」(284)といましめる。(傍点原著者)

たとえば、族譜を合わせていく「通譜」は、「血縁でないのに系図を作り上げて同族となる、いわゆる“通譜”」(275)を含めて、次のように概説されている(185)。

通譜は一族の公議を経て行なわれるのであって、一、二人を譜中に入れる場合もあるが、一族と一族とが譜を通ずる時もある。これには実際親縁関係があるが疎遠になっていた場合もあるが、名家と一族になりたいために通譜を行なう時もある。そして名家のほうでも有力者を一族に入れるため、逆に勧誘することもあるという。

また、同書には、ことに広東にみられた「合族

祠」(同姓諸宗族の連絡機関としての役割を担った祠堂)との対比で、いわゆる“通譜”の際には「明らかでない関係を偽作するだけの手数がはらわれているが、合族祠では[同姓の人々がけっきょく血族であるという擬制を含んでいるのであるが]系譜関係を作り上げる手続きさえ省かれている」(275)とも記されている。

くらしの「安固感」がより広域に有力な「同族結合」を求めることで高められると考えられるなか、牧野巽(1985)は、「中国の村落は……決して孤立的・封鎖的ではない」(278)とも論及し、「中国の同族結合の強い地方では、……いくらか有力な宗族であれば、それは必ず数カ村に跨って存在しているし、その大きなものになれば数十村に跨ってその地方一体に分布していることもある」(277)と説く。しかも、そうした幾村にもまたがって存在する集団を、この先達は「超村落的団体」(277)と書き表す。(傍点原著者)

韓国高麗大学・朴元煥(2009)は、『明清徽州宗族史研究』のなかで、明代万歴年間、徽州・歙県の方氏が結束する経緯を丹念にたどる。祠堂「真応廟」の財産管理をめぐるいさかいで、方氏は、近隣の呉氏、藩氏の勢力に対抗するため、まさに宗族の組織的拡大・強化をはかろうと、「歙県の方氏十派をみずから方儲氏の後裔と認め、連携して鄉村社会の激しい社会的変化に対応することを決議」(47)する。しだいに、「真応廟」は方氏の祠堂としてまつられ、後に方氏の「統宗祠」とされたことが詳述されている。

3-3. “外来者”ばかりの漢口にて“市政”を担ったギルド

斯波義信(2002)は、『中国都市史』をたどりながら、唐代から清代に総人口が8倍に増加しているにもかかわらず、行政都市の構成や数、官

僚の数は1000年あまりほぼ変わりにく、「県城の管下に[地方エリート層が主導する]官治まがいの組織が生まれてくるのは当然の勢い」(116)と論じる。そして、経済の成長にともない、人の「移動が定常化」した「明末以後の中国都市の大半において、外来者の人口比率が全人口のなかでかなりの高さを占めていた」(135)との推究をも踏まえ、都市の社会構造のなかでのそうした事実上の“担い手”について考察を深めている。

特に「都市の解剖図」を描出するにあたり、19世紀に「^{メガロポリス}百万都市化」するエンポリウム[商品の大集散地]・漢口を取り上げる著者は、その「歴史の横顔」に続いて、「大ざっぱな観察では、市民の一割が土着で、漢口の人口の九割がたは外来とされ……よそ者(客寓)がやたらと目立つ」(162)との状況を説き明かした後、「“市民意識”とか“市政”とか“市民コミュニケーション”とかの抽象概念を頭のなかに置いている人は、よそ者だらけの都市にそんなものがあるわけがないと速断してしまうが、実情はまったくちがう」(170)と、次のように“市政執行”を実質的に担った機構の謎解きをする(173)。

十九世紀を通じて漢口市[行政上は鎮]をリードしていたものは、官憲でも郷紳(在職・退職の官僚、進士・挙人・生員などの学位保持者)集団でも大族の集団でもなく、ギルドの連合体であった。このギルドとは、^{こう}行・^{ばん}大行・^{ばん}幫と呼ばれる職業別集団、^{ホイゴアン}會館と呼ばれるももとは同郷の集団、それに内実は同業・同郷集団なのだが、その表看板を書院(私立の学問所)と呼ぶものの、同じく廟・殿・庵など宗教施設として押しとおすものがあつた。朱子にちなむ徽州(新安)商人の紫陽書院、王陽明にちなむ寧波・紹興商人の合体した陽明書院……

などである。

そもそも、利己的、閉鎖的な振る舞いに終始してきたとみられがちなギルドにしても、実際には「“公的”な機能」を果たしてきた⁽⁶⁾というス波義信(2002)は、その具体例として、紫陽書院の資産管理記録(1806年[嘉慶11年])に残された道路・棧橋整備、慈善・福祉活動、消防隊・商団(自衛軍)編成などを掲げる(175-179)。さらに、1870年代には、薬種、紙、票号など、八大業種の「なかば公的なギルドの連合体」を母体とする「八大行」が、いよいよ「漢口全市にわたる福祉と治安」を担い始めたことを力説する(180-181)。「老総」というその頂点に立った人物の経歴をたどるこの碩学は、「士(紳士)と商が融合したリーダーに統率されていた、といったほうがよいかもしれない」(180)とも付言する。

先述の通り、「士商互動」を唱える余英時(2009)は、徽州商人をはじめ、明清の商人が「商業経営を厳粛でさらには神聖なこと」ととられ、天下を安らかに治めるという「士」にも比肩するほどに、みずからの「社会[的]責任」(26)を心得ていたと語る。地方政府としても、「社会福祉のために惜しげなく寄付するよう商人に声をかけるのが一般的で」(27)、文人が「富」は「仁義」の物質的な基盤であると唱導する様子もみられたという。

W. Rowe(原書1989/魯西奇・羅杜芳訳2008)は、19世紀の『漢口』において、富を手にした大商人たちがそのように公益活動に傾注したのは、「みずからの地位を社会的に正当化するひとつの手立てでもあった」(60/73)と読み解く。時折、漢口で商売を続けるにあたり、地方政府や地元要人から寄付を迫られることもあるが、治水や公安などへの取り組みは、そうした商人が

資金力でもって周辺農村に管理権限やある意味での政治的権威を広げるひとつの手段であったとも考察している(184/221)。

漢口のほか、重慶、蘇州などでも展開されたそうした都市運営を、J. フリードマン(2008)は「今日の文脈において極めて興味深い」(19)としながらも、「滞留者や外来住民の都市に、全住民が結集しえたような象徴的な核が存在せず、“そこには、みずから^{セルフ}といったものがなかった”」(200)とG. スタインの言葉をもじってみせ、一考を要することを説く。加えて、「これは誰も説明責任を問われないインフォーマルな手立てであった」(201)と洞見する。

なお、厦門大学歴史研究所長・王日根(2007)は、『中国会館史』を探究するなかで、ことに人の移動との関係において、官からみた会館の役割とは、「流寓者の管理」と概括する。明清代、「一部の地域では、流寓者が土地の者を超える地域さえ現れた。その地の者は、家族、そして里甲、保甲、坊廂を手立てに管理すればよいが、流寓者はこれらの組織ではとらえがたい。業種の多様性、人員の流動性、文化の複雑さ、規模の膨大さに鑑みて、会館の社会管理機能には、上述の各種組織にはない優位性が明らかにみられた」(25-26)と評する。

3-4. “女性たち”はどこに

徽州商人のくらしぶりについては、先述の通り、複数の拠点を行き来する居住状態が見出され、「一世夫妻三年半」とも語られてきた。朱子学的世界観のもと、妻(第一夫人)は、その婚家が「居場所」とされ、何にもまして、義父母につくし、幼い息子を育てながら、人に後ろ指をさされることがないように、主人の帰りを待ちわびることが求められた(メイエル 1995, 82, 98)。そして、若くして夫一ときに、婚約者一

と死別しても、婚家に属する寡婦として、婦徳という「同じ鑄型」に始終はめこまれた(123, 127)。

明代、貞節を重んじ、節を曲げずに殉じた数多くの女性を生み出したのは、特に徽州府歙県であった。方志[地方誌]の記録によれば、1368年から1609年まで、歙県において烈婦[貞節を守るために命をかけたり、夫の死に殉じた女性]は191名であり、ことに断食による“自殺”の風潮が際立つとの考察もなされている(衣若蘭 2011, 78-79)。

『中国婚姻小史』の取りまとめにあたった古風(2010)は、明代の太祖のとき、貞節を守るそうした女性に関わるきまりが定められたことを説く。「民間の寡婦について、三十歳までに夫が亡くなくてもその志を守り、五十歳から後も節を曲げなかったものには、旌表[碑や牌坊をたてて、その貞女を称賛]し、当家の徭役を免除する」(169)とされたが、このような考え方の源流は、朱熹と呂祖謙が共同で編んだ宋代の思想書『近思録』におさめられた、「餓死しても事は極めて小さく、操を破るとは事が極めて大きい」との程伊川(程頤)の言葉にまでたどれると詳述している(138)。

ところで、長年にわたり郷里を離れて商売する徽州商人には、「養瘦馬」と言い習わして妾を囲う風習がみられた(王振忠 1996, 156)。また、妓女と時を過ごすことにも、出費が惜しまれなかったという(136)。上海師範大学・唐力行他(2007)は、とりわけ、徽州商人が故郷にて妻をめとり、商売に出向いた地では妾を扶養する生活に関して、次のように推考している(136-137)。

徽州人は宗族の觀念がたいへん強く、徽

州商人は、概して、郷土を離れても故郷とのつながりを絶やさない。彼らは長期にわたり外へ出て商売する。徽州には家をおいたままで、妻がそれぞれの家を守る。数多くの徽州商人は商売に出た地には妾をおき、“両頭大”[両端がともに首位]という徽州独特の婚姻スタイルを形成した。すなわち、故郷で結婚した妻と出先で目をかけた女性は、たいていは一生会うこともなく、そうした妾の地位は、実質的には故郷にいる妻と同格であった。

最後に、パリ第7大学にて民族学を講じていたC. メイエールは、その著書『中国女性の歴史』(原書 1986/訳 1995)にて、「数世紀にわたって儒教的家族に閉じ込められ、劣った存在として服従だけをもとめる制度に縛りつけられてきた中国女性」(368)が、「ひそかな反抗心の精神的ささえ」(55)としたのは、彼女たちの「居場所」にかねてから浸透していた仏教であったと、次のように論じている(368-369)。

女の社会が仏教の信仰に疎外からの脱出の道を見つけ、そして、おそらくは自分たちの渴望に対する解答をさがし出していたが、それはさほど危険視はされていなかった。信心は女にふさわしいものとされていたため、男の社会は無関心をもって仏教信仰を容認していたのだ。もちろん、仏教はその信者たちの心に、個々人を大切にする精神の種をうえつけており、儒教の社会的道徳は、それをつねにおそるべき混乱の要因とみなしてきた。だが、外見上は、こうした仏教の精神も家族構造のなかで無力化され、窒息させられて、しかも、弱者には役立てることのできないものと考えられていた。

なお、仏教のいわゆる「無力化」された局面に関しては、臼井佐知子(2005, 409)が、明清代に宗族関係が強化されるなか、そうした個人の信仰には変質が生じ、「人々による寺院などの修復が、人々の佛教などそれ自體への信仰にもとづくものというよりは、祖先が行った善行を子孫は受け継ぐべきであるという認識にもとづく行為として行われており、またそれらの修復が往々にして同族の人々が参加する形で行われている」と概観している。

3-5. いかなる“眼”でもって描き出されてきたのか

このセクションでは、徽州商人の実質的には「パラレル“居住”」に関わる先覚の考究を概観してきた。これより、先にも述べた「ニュートニアン都市ガバナンス」、そして「量子都市ガバナンス」の理論的枠組みの試案に照らしながら、それらがいかなる“眼”でもって描き出されてきたのか、換言すれば、そうした高論が練り上げられた際の“ものの見方”を改めて考察しつつ、あわせて「試案」自体においても織り込むことが必要となりそうな要素を書き留めておきたい。

まず、徽州[新安]商人という言葉であるが、これは《流動的》と写し取られた社会にあって、彼らが《目覚め》たみずからの存在を際立たせるのに具合がよく、研究者にとっても、《重要性》を提起したい《観察》対象をまさに明示しやすい、“出生地名”と“職名”との組み合わせで表された「個のあり方」とまとめられよう。同様な方法で、《新安画家》なる有意なアイデンティティも語られていた。《故郷》と《外地/僑寓地》とを《往復/行き来》する居住状態が特徴とされるこの徽州商人にあっては、《徽州人》、《漢口人》のように“出生地名”+人、“居住地名”+人とのかたちで《使い分け》もなされた

いう。このような表現形式をめぐる、W. Rowe(1984, 250, 342)は、《出生地/居住地アイデンティティ》と称して《ローカル・アイデンティティの多元化》を、また斯波義信(2002, 143)は、《状況に応じていくつかの名刺を出す》ようなさまにたとえて《多重・多元なアイデンティティ》を力説していた。そして、徽州商人の《移動/“業”の選択》戦略は、臼井佐知子(2005, 143, 144, 146)によって、さしずめ《“液体”の動き》と端的に読み解かれていた。

そうした《“液体”の動き》は、「流動者からみた動的なとらえ方」という点では、まさしく「ニュートニアン都市ガバナンス」の「液相」につながる。ただし、暫定的に付した定義説明の「固相の想定する静的枠組みを越え」とは、「不動で不変の“国民国家”という枠組み」よりも、やはり《入れ子式の箱のような古くから好まれた型》(フリードマン 2008, 211)の意でもって解される必要があろう。加えて、「ネットワーク状の関係性の中で編成されていく」のは、「地域共同体」にもまして、《宗族》なる父系の親族集団が深く関係した《超村落的団体/同郷・同業集団/ギルドの連合体》であること、さらには社会の重要な“歯車”と目される《士商》は、別個の「アクター」として列挙されるよりむしろ《互動》(余 2009, 23)とも語られ、しかも《理気論的世界観》のもと、それぞれに具合よく仕立てられた《二重の価値観》(曹他 2010, 118)によって彼らのプレゼンスが巧妙に高められていく“からくり”に留意しなければならない。この「流動者」には、《社会[的]責任/公益活動/市政執行》という“意表をつく”要語まで現れる。その活動拠点である《会館》は、「流動者」自身にとってのみならず、「固相」の《官》にも《外来者/流寓者の管理》を進める手段として有用であったと評されていた(王 2007, 25-26)。

もっとも、“女性たち”をめぐるのは、特定の《価値観》に根ざした《婦徳》なる《類型》にはめこまれ、静かにして動かないものとされる。徽州商人の《妻/寡婦/貞女/烈婦》や《妾》という「私」として、それぞれ自明とされる《居場所》で日々をくらすことが「あるべき姿」と説かれ、なかにはその《“居場所”》を《牌坊》に転じるようになった女性の“立派な生き方”も語り継がれている。いずれにせよ、その「「居住」状態/個のあり方」は、「固相」はもとより「液相」の《観察者》からも見通しのきく従順な存在としてとらえられてきた。されど、《女の社会》は、そうした《儒教的家族》という仕掛けから抜け出ようと、《仏教》をひとつの糸口に、みずからにとって十分な《解》となりうる「場/個のあり方」を探し出していたとも《観察》されている(メイエル 1995, 55, 368-369)。ただ、これもまた、言わば《近似的》な描出にはかならない。

なお、牧野巽(1985)や臼井佐知子(2005)の《族譜編纂/通譜》をめぐる論考には、「個のあり方」の確認に際して、《意志的・努力的》な《創作/偽作》という“空ごと”が組み入れられていることに留意すべきと説かれていたが、これは“物理学からの類推”では想定しえなかった点である。

さて、このように言わば「量子力学」が現れる前の「眼」でもって、基本的には「液相」、そして「固相」からの《観察》というように、“古典的”なパラダイムにてひとまず整理されうる先学の考究を改めてたどると、さらに深めて「量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありよう」と解することが妥当と直観されるところも見てとれる。先にもふれた、社会を導く《担い手》と見出された《士商》の《互動》や、《矛盾する価値観》をあわせ持って生き抜く“女性

たち”に加えて、《“両頭大”[両端がともに首位]》(唐他 2007, 136-137)という“パラレル”な「“居住”状態」や、気鋭の物理学者 D. ゴーハー著『クォンタム・セルフ[量子的自己]』(原書 1990/中島訳 1991, 208)の「私はまた私—あなた(あなたとの統一)でもある」⁽⁷⁾を想起させる《特定の空間、時間》を超越した「場/個のあり方」などは、そうした好例であろう。

これらは量子力学のパラダイムでとらえると、いずれもコペンハーゲン解釈のごとき「居住」状態/アイデンティティ(個のあり方)の収縮を仮定した上で、必要に応じて整えた“空ごと”も含め、《目覚め》るべきあるいは《観察》されるべき至当な“状態/あり方”をその都度“作為的”に選び出し、それ以外はさしあたり捨て去っている—これがまさに《使い分け》との記述につながる—と読み解ける。そして、そうした繰り返しのなか、いくつかの見出されるはずの有意な“状態/あり方”のみが、あたかも多世界解釈のように重ね合わせ、もつれ合いになっているかのように、《互動》や《多重/多元》などと記述されていると推察する。ともすると見過ごされかねないのは、やはり、《観察者》が注視する以外にも、「量子力学的に共存している複数の状態/あり方の全体」において、日々を生き抜く“闘い”が展開されている(谷村 2012, 67)状況であろう。

4. 「“考えられるガバナンス”の記述」の練磨

「量子都市ガバナンス」論の構築にむけて作業をさらに進展させようと、本論文においては、「パラレル“居住”」と見てとれる「徽州商人のくらし」の説き明かし方を事例に一—それに際して最初のステップとした「中国社会の変動が読み解かれる視角から」を含め—、先学の考究

を解得し，ひいてはそれらが「いかなる“ものの見方”であるのか」を考察してきた。

これまでの小考に鑑みて，この最終セクションにおいては，本論文の主要課題である「“考えられるガバナンス”の記述」の練磨をはかりたい。なお，Box 1 に注記したように，ここでも“/”とは“and/or”，すなわち“および/または”の意で遣う。

まずは，【1. はじめに】掲げた「ニュートニアン都市ガバナンス」には，次のようなバージョン・アップをほどこす一補筆部分は，イタリックにて表記一。

【ニュートニアン都市ガバナンス】

古典力学から推しはかるこのガバナンスは，以下の「固相」や「液相」の考え方を含め，その世界観は，最初に「不動で不変の“国民国家”という枠組み」を設定し，社会全体を国際機関，市民社会組織，企業市民等の「アクター」が織りなす精巧な機械のようにとらえ，人々の「定住」を支える基本法則が世界を支配しているとの見方といえよう。このニュートニアン・パラダイムは，社会を“近似的”に扱うのであれば有効との類推も成り立ちうる。

なお，現代社会においては，このような「機械論的世界観」をベースに，「道徳的・倫理的な当為法則」が巧妙に仕組まれ，いくつか特定の価値観が際立つモデルの浸透がはかられうる。

.....

・「固相のガバナンス」とは，テリトリーをもとに定住者が編成する旧来の共同体，地方・中央政府という一いわゆる「入れ子式の箱」のような型とも見てとれる一近代国民国家の構成要素を基軸にしたもので，これは，そうしたロジックの補

強・強化を企図する国際機関やグローバル企業によっても共有される。なお，移住者は，唯一の最適解を求めて流入してきた新定住者との枠組みの中で処理される。

.....

・「液相のガバナンス」とは，唯一の最適解として選択された定住地からグローバル空間を駆け回る人々や，そうした定住地を求めた移民が織りなすトランスローカル／トランスナショナルな構図のように，固相の想定する静的枠組みを越え，地域共同体が親族，政治・経済活動，倫理・価値観や世界観などのさまざまな結びつきを通じて，複数の社会とのネットワーク状の関係性の中で編成されていくという，流動者からみた動的なとらえ方である。ときに，「アクター」のとけ合うさまが語られ，小さな政府，社会的責任，公益事業などの要語のもと，有力な流動者の集団が実質的に展開する“市政”の可能性もあろう。もっとも，部分的には，具合よく“静かにして動かない”担い手を創出して，流動者のくらしを支えるような仕組みが形成・強化されるという情況さえ，ことによると見出されうる。

続いて，「量子都市ガバナンス」についても，その語義にひとまず手を入れておきたい一補筆部分は，イタリックにて表記一。

【量子都市ガバナンス】

「量子都市ガバナンス」とは，「機械論的世界観」にもとづくみなし“定住”社会を，そこに浸透したと見てとる倫理・価値観や世界観などの様相も含めて，“近似的”に読み解き，運営して

きたニュートニアン・パラダイムを深化させ、複数の「居住」状態/アイデンティティの—“実体”としてのみならず“スタンス”としての意でも語られる—量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありようを、多世界解釈にならない、多“居住”/多アイデンティティ解釈することから思索する都市ガバナンスの提案である。

この「量子都市ガバナンス」の「核心部分である“量子力学的なありよう”の解釈」に関して、従前の推究に少しばかり筆を加えてみたい。具体的には、谷村光浩が、その前著「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる「量子都市ガバナンス」の記述」(2012)にて提起した、量子力学と古典力学とのつぎはぎと指摘されるコペンハーゲン解釈から基本的には推しはかってきた読み解き方—「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」—(66)、ならびに、それにも照らし合わせながら、多世界解釈から類推される記述—「多“居住”/多アイデンティティ解釈」—(66-67)について⁽⁸⁾、それぞれ、次のようなバージョン・アップをほどこす—補筆部分は、イタリックにて表記—。

■「“居住”状態/アイデンティティの蓋然的解釈」

この「“居住”状態/アイデンティティ(個のあり方)の蓋然的解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態/あり方が、「“実在”(“潜在的なもの”)」ととらえられる。これには、事実にもとづく—一言わば、*“シュレーディンガー方程式”で論理的に説きうるような—「潜在的なもの」*に加えて、*根拠もなく都合良く仕立て上げられた—“シュレーディンガー方程式”とはまったく無関係な—“つくりごと”*が含まれることがある。

しかしながら、調査時には、観察者—みずからを観察する際には当人—によって、いずれかの「“居住”状態/アイデンティティ」が適宜選り出され、そのひとつの状態/あり方以外はひとまず捨てられる。言うなれば、「“居住”状態/アイデンティティの収縮」が仮定されている。いかに重ね合わせ、もつれ合いが説かれたとしても、実のところ、「既存パラダイム」の延長線上で、観察された(もしくは観察されうるであろう)典型的な「ひとつの状態/あり方」が個々に拾い上げられていく“つじつま合わせ”のアプローチである—観察者にとって“有意でない”状態/あり方は、実質的には虚ろなものやその時限りの瑣末な現象と処理される恐れがある—。そして、さらにはそうした典型的な状態/あり方のみが“作為的”に重ね合わされ、あたかも多世界解釈のような記述で、調査対象についての特徴が表されることさえ見受けられる。

なお、ときに“最たる”状態/あり方が、“実体”としてのみならず、“相応しい”とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意でも語られることがある。

■「多“居住”/多アイデンティティ解釈」

この「多“居住”/多アイデンティティ(個のあり方)解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態/あり方の“全体”を、多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。この“全体”には、事実にもとづかず都合良く仕立て上げられた“つくりごと”が含まれていることがある。

調査時に、どの“居住”状態/アイデンティティの観察者になるかは、各状態/あり方の共存の程度に関係することになる。当人がみずからを観察する場合にも、「周囲との相互作用」によって、ある状態/あり方がことのほか意識されるかもしれない。もっとも、「“居住”状態/アイデンティティの収縮」は一切考えず、他の状

態/あり方も相変わらず共存しているとみる。

あらかじめ設定した見極めたいものだけに着目するという観察者の視座ではなく、ただ込み入った例解とならぬようにとの思いから、とりあえずここに言及した事項を順々に取り上げると、「個人がA地点の“居住”状態、B地点の“居住”状態との重ね合わせ、もつれ合いになっている」ありようでは、調査時に、ひとつの分枝では、観察者はその個人がA地点の“居住”状態にあるとの結果を見る。別の分枝では、同じ観察者が、同じ個人がB地点の“居住”状態にあるとの結果を見る。

また、「個人がXという個のあり方とYという個のあり方との重ね合わせ、もつれ合いになっている」ありようでは、調査時に、ひとつの分枝では、観察者はその個人がXという個のあり方にあるとの結果を見る。別の分枝では、同じ観察者が、同じ個人がYという個のあり方にあるとの結果を見る。

いずれにしても、それぞれの観察者は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな“居住”状態/アイデンティティの中からその結果が見えたのは単なる偶然だと思ってしまう。しかし、「現実」の“全体”像を見渡してみれば、可能な状態/あり方のすべてが実際に生じているとみる。

なお、ある“居住”状態/アイデンティティが、“実体”としてのみならず、“相応しい”とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されても、その他の状態/あり方も絶えず共存していると思える。

最後に、この事例研究にて進展をはかった「量子都市ガバナンス」論に関する要語の意も、むしろ依然として「試案」である。「グローバル化・都市化をすべての人々のために」を心に刻みながら、今後も都市・地域開発、そしてさま

ざまな分野のガバナンスをめぐる先学の考究などもさらに踏まえ、絶えず見直しを行ない、より深く推しはかっていきたい。

今般、この小論を整えるにあたり、ことに中国思想・都市史や徽州商人の研究から実に多くのことを学ばせていただいた。改めて碩学の諸氏に感謝申し上げるとともに、「外」からでも「内」からでもなく—いずれにせよ、いわゆる“主潮”の説き明かしや、それとの関連において見極めたいものの読み解きに終始留まるのではなく—「量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありよう」にならば、たとえば人々の“闘い”の「場/個のあり方」を再考する上述の「試案」が、僭越ながら、当該領域においても何らかの思索の新たな機縁となれば、望外の幸せである。

■注

- (1) 中国については、2011年、国内の流動者数が2億3,000万人に達し、健全な都市化をはかる上で、農民工の都市住民化がひとつの重要な政策課題とされている(UN-Habitat et al. 2012, ix)。
- (2) 本研究の起点については、谷村光浩が、その前著“移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる「量子都市ガバナンス」の記述”(2012, 49)に述べた通りである。

この作業を展開する上で、ひとつの鍵となったのは、人々の「パラレル“居住”」というくらし方であったが、これは国際連合大学(UNU)学長室等での研究プロジェクトを通じて考察を進め(Tanimura 2005, 66-67; 2006, 276)、特に、“Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development Strategies”[国連ハビタットによる都市開発政策を越えて](Tanimura 2006)では、その具体的な事例を整理した後、これに対応しうるガバナンスとして、量子力学の「多世界解釈」にヒントを得た「量子都市ガバナンス」という試案を提起した。

- (3) 明代、徽州—現在の安徽省・黄山のふもと—の数

多くの人々が商業に携わるようになった背景には、東京外国語大学・臼井佐知子が、その大著『徽州商人の研究』(2005)において、[1]地形上、耕作地が限られていたこと、[2]紙、筆、硯、墨などの特産品を有していたこと、[3]発展する江南デルタに近く、交通の便にも恵まれたこと、さらには[4]子々孫々にいたるまで優位さを保持しえた塩の専売方法などが総じて掲げられていると、簡潔に整理している(75, 77)。もっとも、富裕な生活を手にすることがかなった商人は一部にすぎず、「多くは零細な行商人であり、また成功者の多くも零細な行商人から身を興した者であった」(81)ともいう。

清代の王世貞が記すところによれば、「おおそ徽州社会は、人々の3割が邑[郷村(生まれ育った土地)]に留まり、7割が天下[全国]にいる。その資産は1割が内[家郷]に、9割が外[他所]にある」といった状況であった(趙華富 2004, 120)。

- (4) この辛亥革命をめぐり、溝口雄三(2007, 216)は、「郷里空間のネットワーク領域が省どまりであることにより、王朝国家に代わる新しい国家構想が欠如していた」とも問題提起している。

なお、この省レベルへの拡充に関して、P. コーエン(1988)は、ダイアナ・ラリーの軍閥研究(Lary, Diana 1980, "Warlord Studies," *Modern China* 6, 4)を引きながら、「軍閥政治が常に省単位の現象であると考えることに対して—あるいは典型的に省単位の現象であると考えることに対してすら—、ラリーは警告を発する。……軍閥の勢力は時として複数の省に及ぶこともあったし、他方で省の一部にしか及ばない場合も多かったのである」(242-243)と述べている。

- (5) なお、明清政府も宗族関係の強化を促したが、そのねらいは「[基層社会における]秩序の維持と統治の圓滑化」であったという(臼井 2005, 409)。
- (6) 1940年代、北京でのギルド調査を進めた仁井田陞(1951)は、東京大学東洋文化研究所の研究成果報告書である『中国の社会とギルド』にて、ギルドが形成されるにいたった直接の要因とは「外界との関係……において仲間の利益殊に経済的利益を守ろうとする点」に加え、「仲間の内における個別の自由行動からも、仲間全体の利益を守ろうとする点」(69)にあったと強調する。そして、「集團内部……に對してだけは、親愛信義の徳目を守るが、その外

部……に對しては、かかる徳目を通用させず、對内道德……と對外道德……との使い分けが見られる」(15)とも指摘する。ときに、「ギルドの聯合體」が「都市行政に干與」(22)することについては、次のように記している(51)。

中國のギルドマーチャント又はギルド結合體は市政に參與するということ聞こえはよいが、官憲が怠慢ではあったらして置く道路橋梁の修理や、消防夜警や、救貧などを、止むを得ずして自ら引き受けるのであり、換言すればそういう工合に官憲から仕向けられているともいえる……。かくて、中國のギルドマーチャント乃至ギルド結合體の類は、官憲との二重政府的な對立というよりも、……それは飽くまで[官憲の行政の空白をうめる]補充的なものであった。

- (7) なお、D. ゴーハーの『クオンタム・セルフ[量子的自己]』については、谷村光浩(2012, 63-64)の【4-3. 量子的な“私”】に、その要点を取りまとめている。
- (8) ここでは、「居住」と「アイデンティティ」のみ取り上げているが、谷村光浩(2012, 66)においても明示したように、これらの「事項をこえた描出を後に案出する必要性が生じることも推測され、この新たな見方は、あくまでもより一層考究されるべき素案である」。

■参考文献

- 曹天生他 2010,『重向新安問碧流』, 北京, 經濟科学出版社。
- コーエン, ポール(佐藤慎一訳)1988,『知の帝国主義』, 東京, 平凡社。
- フリードマン, ジョン(谷村光浩訳)2008,『中国 都市への変貌』, 東京, 鹿島出版会。
- 古風 2010,『中国婚姻小史』, 北京, 東方出版社。
- 廣松渉他編 1998,『岩波哲学・思想事典』, 東京, 岩波書店。
- 胡適(唐德剛訳注)2005,『胡適口述自伝』, 桂林, 広西師範大学出版社。
- 池田知久 2007, “秦漢帝国による天下統一”, 溝口雄三他『中国思想史』, pp. 1-84, 東京, 東京大学出版会。
- IOM (International Organization for Migration) 2011, *World Migration Report 2011*, Geneva, IOM.

- 小島毅 2007, “唐宋の变革”, 溝口雄三他『中国思想史』, pp. 85-140, 東京, 東京大学出版会.
- 牧野巽 1985,『中国社会史の諸問題』, 東京, 御茶の水書房.
- メイエル, シャルル(辻由美訳)1995,『中国女性の歴史』, 東京, 白水社.
- 溝口雄三 2007, “転換期としての明末清初期・激動の清末民国初期”, 溝口雄三他『中国思想史』, pp. 141-241, 東京, 東京大学出版会.
- 溝口雄三他 2007,『中国思想史』, 東京, 東京大学出版会.
- 中島楽章 2009,『徽州商人と明清中国』, 東京, 山川出版社.
- 仁井田陞 1951,『中國の社會とギルド』, 東京, 岩波書店.
- 朴元燾2009,『明清徽州宗族史研究』, 北京, 中国社会科学出版社.
- Rowe, William 1984, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford, Stanford University Press.
- Rowe, William 1989, *Hankow: Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895*, Stanford, Stanford University Press.
- Rowe, William (江溶, 魯西奇訳) 2005,『漢口: 一個中国城市的商業と社会(1796-1889)』, 北京, 中国人民大学出版社.
- Rowe, William (魯西奇, 羅杜芳訳) 2008,『漢口: 一個中国城市的衝突と社区(1796-1895)』, 北京, 中国人民大学出版社.
- 斯波義信 2002,『中国都市史』, 東京, 東京大学出版会.
- 竹内薫 2001,『ゼロから学ぶ量子力学』, 東京, 講談社.
- 竹内薫 2004,『世界が変わる現代物理学』, 東京, 筑摩書房.
- 唐力行他 2007,『蘇州と徽州』, 北京, 商務印書館.
- Tanimura, Mitsuhiro 2005, “Development and Urban Futures”, *The Journal of Social Science*, No. 54, pp. 49-72, Tokyo, International Christian University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2006, “Beyond UN-Habitat’s Classic Framework in Urban Development Strategies”, *The Journal of Social Science*, No. 57, pp. 275-304, Tokyo, International Christian University.
- 谷村光浩 2009, “物理学からの類推より‘考えられるガバナンス’の記述”,『名城論叢』, Vol. 9 No. 4, pp. 51-66, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- Tanimura, Mitsuhiro 2009, “Descriptions of ‘Conceivable Governance’ by Analogy with Physics”, *The Meijo Review*, Vol. 10 No. 2, pp. 27-46, Nagoya, The Society of Economics and Business Management, Meijo University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2011 (李勇訳・程雅琴校), “從物理学類推得出的‘可想象治理’記述”, 王名主編『中国非営利評論』, Vol. 8, pp. 92-115, 北京, 社会科学文献出版社.
- 谷村光浩 2012, “移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる「量子都市ガバナンス」の記述”,『名城論叢』, Vol. 12 No. 4, pp. 49-70, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.
- UNCHS (United Nations Centre for Human Settlements) 2001, *Cities in a Globalizing World*, London, Earthscan Publications Ltd.
- UN-Habitat et al. 2012, *The State of China’s Cities 2012/2013*, Beijing, Foreign Languages Press.
- 臼井佐知子 2005,『徽州商人の研究』, 東京, 汲古書院.
- 王日根 2007,『中国会館史』, 上海, 東方出版中心.
- 王振忠 1996,『明清徽商と淮揚社会変遷』, 北京, 三聯書店.
- 衣若蘭 2011,『史学与性別:《明史・列女伝》与明代女性史之建構』, 太原, 山西教育出版社.
- 余英時(陶徳民訳)2009, “近世中国における儒教倫理と商人精神”, 陶徳民他編『東アジアにおける公益思想の変容』, pp. 15-30, 東京, 日本経済評論社.
- 張長虹 2010,『品鑑と経営—明末清初徽商芸術贊助研究』, 北京, 北京大学出版社.
- 趙華富 2004,『徽州宗族研究』, 合肥, 安徽大学出版社.
- ゾーハー, ダナー(中島健訳)1991,『クォンタム・セルフ』, 東京, 青土社.